

Spatial analysis of the geographical distribution of thyroid cancer cases from the first-round
thyroid ultrasound examination in Fukushima Prefecture

日本における甲状腺片葉欠失バリエントの頻度とその特色：福島県県民健康調査から

鈴木悟

放射線医学県民健康管理センター

著者

放射線医学県民健康管理センター：鈴木悟、緑川早苗、松塚崇、志村浩己、高橋秀人、大平哲也、大津留晶、阿部正文、鈴木眞一、山下俊一

医学部臨床検査学講座：伊藤祐子

緒言

甲状腺片葉欠失バリエント（以下片葉バリエント）は特に無症状で、甲状腺の片葉が欠失するまれな先天的バリエーションです。臨床的症状や所見がないため、甲状腺や、耳鼻咽喉学的疾患、あるいは頸部に関連する疾患として、超音波検査施行時に偶然見つかります。片葉バリエントの最初の報告は1866年、ハンドフィールド・ジョーンズによるものです。系統的な甲状腺超音波による健常小児の片葉バリエントの頻度は、最初にベルギーで0.2%と報告されました。今回超音波を用い片葉バリエントの頻度を算出し、日本における特色を紹介します。

対象

福島県県民健康調査「甲状腺検査」で平成23年10月～平成27年4月まで行われた先行検査における震災時0-18歳の男女29万2,200例。

結果

片葉バリエントの割合は全体で0.022%（67名）でした。そのうち左葉のバリエント（55名）が右葉のバリエント（12名）より有意に多いことが分かりました（ $p<0.001$ ）。左葉のバリエントには性差を認めませんでした。右葉のバリエントは女性で有意に多いことが分かりました（ $p=0.018$ ）。体表面積で補正した甲状腺の大きさは、片葉バリエントの症例で存在する片葉としては、両葉保有者の同側片葉よりも有意に大きいことが分かりました（ $p<0.001$ ）。

結論

片葉バリエントの割合は、他国の報告（0.02-0.25%）とほぼ同等か低い頻度となりました。全体では男女差はありませんでした。両葉とも反対側が代償的に大きくなっていました。これらの知見は、これからの小児甲状腺診療の一助になると考えられます。

掲載情報

「Thyroid」(2017)

Suzuki S, Midorikawa S, Matsuzuka T, Fukushima T, Ito Y, Shimura H, Takahashi H, Ohira T, Ohtsuru A, Abe M, Suzuki S, Yamashita S

Thyroid. 2017 Aug; 27(8):1011-1016.